

# 地域の活性化を目指した第一歩

## ～基盤整備事業をきっかけとした取り組み～

去る10月16日(土)に、東金市東中島地区において黒大豆(枝豆)の消費者を交えての収穫祭が初めて行われました。

東中島地区では基盤整備事業によって、水田や畑が整備されました。

整備の目的は、水田農業の担い手の育成や、地域農業の活性化とされています。そのため、実行委員会において話し合いを重ね、今年は、消費者との交流を目的に、黒大豆栽培と地元小学校児童への農業体験を行いました。

黒大豆は、オーナー制(注)を計画し、32組39区画の申し込みを受けていました。

しかし、台風22号の影響により、大豆が傷んでしまいました。そこで、オーナー申込者を対象にした枝豆収穫祭に変更して実施しました。

当日は、約60名の夫婦や親子の参加があり、収穫作業と取れたての枝豆や黒豆の煮豆などの試食を楽しんでいました。

第一歩の取り組みでしたが、早くも「来年もまた」「来年こそは」という声が、消費者と委員会のメンバー双方から聞こえてきています。

(注)オーナー制:区画ごとに消費者を募り、収穫期にほ場を引き渡し、自ら収穫してもらう仕組み



黒大豆の収穫風景



黒大豆料理の試食



福岡小の稲刈体験

## 技術情報・野菜 効果抜群!!

### おうしょく ヨトウ類に黄色蛍光灯

今年は、多くの野菜類に被害をもたらすハスモンヨトウなどの夜蛾類<sup>やが</sup>が多発しました。一夜にして食い荒らされ、見るも無惨に変わり果てた作物を見ると本当に嫌になってしまいます。

ヨトウ類に効く薬剤は多く販売されていますが、ほとんどは、体長1cm以下の3齢幼虫までしか効果が期待できません。

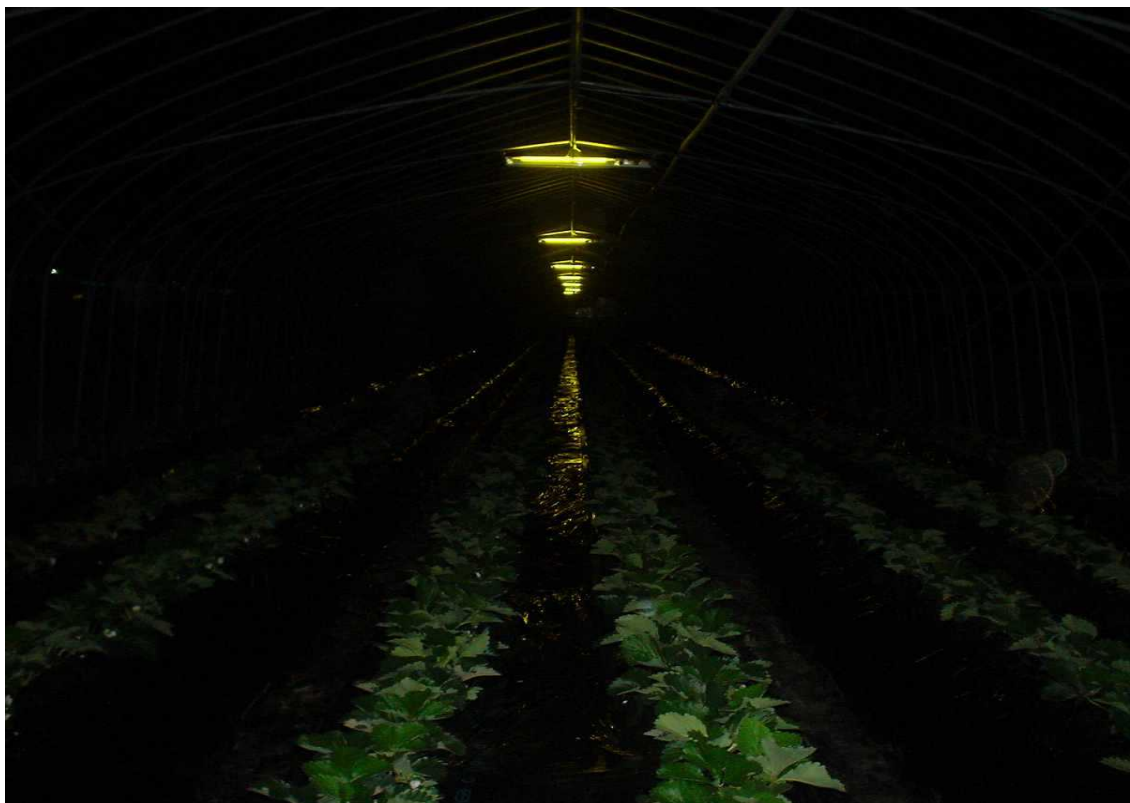
そこで効果的なのが黄色蛍光灯の設置です。これは、ヨトウ類が黄色い光の下では繁殖活動が抑えられる性質を利用した防除法です。

黄色蛍光灯は、イチゴにおいて今年は明らかな効果を発揮しています。

8月下旬に、20Wの黄色の蛍光灯を7m間隔に設置し、11月中旬までの間、夜間点灯し続けました。その結果、無点灯区に比べて被害率は半分以下ですみました。

イチゴの場合、電照装置を使って設置することも可能で、管内のイチゴ農家では数カ所導入が始まっています。

興味のある方は、検討してみてください。



イチゴ圃場で試験中の黄色蛍光灯

# 柿の剪定

## 剪定の手順

1. 樹全体をみながら、管理可能な樹高に収まっているか、樹冠上部に大きな枝があり下部が暗くなっていないかなどを見ます。

2. 大きな枝を間引きます。

大きな枝を数多く間引く場合は、先端から徐々に切りつめ、3年程かけます。

3. 結果母枝などの細かい枝を剪定します。

柿は、先端の3芽程度が花芽となります。

そこで、結果母枝の先端は詰めず、夏の結果枝の発生した状態をイメージしながら結果母枝を間引きます。

また、結果部は先へ先へと進み、細く垂れ下がる枝になってしまうので、元の良い結果母枝があれば切り戻します。

このように、柿の剪定は間引き剪定と切り戻し剪定を組み合わせで行います。

結果母枝の配置は主枝あるいは亜主枝の先端を頂点とした2等辺三角形が理想です。

## ミミズを使ったたい肥の品質判定法

ミミズによるたい肥のユニークな品質判定法を紹介します。

ミミズは生息環境やたい肥の水分、pH等に影響を受けやすく、アンモニアなどのガスが発生する状態の中には住めません。このような性質を利用して、たい肥の品質（腐熟度等）を調べてみましょう。

やり方は、図のとおりです。なお、判定に使うミミズは釣具屋さんで売っている長さが5～7cm程度のものがいいでしょう。

一時間ほど経過したら覆いを外し、ミミズの行動を観察します。暗い所を好むミミズは、腐熟が進んだたい肥では、どんどん中に潜っていきます。反対に未熟なたい肥では、潜ろうとせず、逃げようとコップ面をはい回ったり、たい肥の上でぐったりしてしまいます。

誰でも簡単にできるたい肥の腐熟度をミミズ品質判定法で試してみたいかどうか。

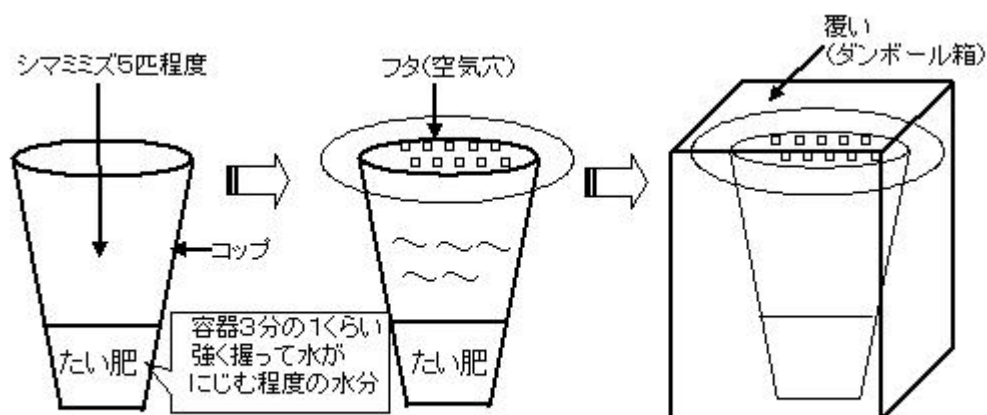


図 ミミズによる堆肥の品質判定法のやり方

# シリーズ・伸びる直売所をめざして

## 第3回

### 広がる！交流の輪

食と農の距離が離れているといわれて久しいですが、農産物直売所には、その距離を縮める可能性を持っています。

直売所は単に地域の農産物売る場所だけでなく、生産者と消費者がふれあい、交流できる格好の場所です。直売所に並ぶ農産物には、それを栽培する生産者の想いがあります。

直売所は消費者と生産者が会話をする機会が多く、お互いの理解を深める上で優れた交流の場となっています。

ところが最近の消費者は、それ以上に栽培の仕方や作業体験を望む人が増えてきています。実際に収穫体験をした人は、「初めての体験で感動した。」という人が少なくありません。このようことから交流の和が広がってきています。

これからの直売所は、料理講習や農作業体験などの消費者交流活動を取り入れることが必要となってくるでしょう。それにより直売所が地域農業の交流拠点としてますます重要となってくるはずです。

# シリーズ・<sup>いま</sup>現在を輝く 横芝町・<sup>おしおよしえ</sup>押尾芳江さん

## 人との出会いを大切に

今回は横芝町鳥喰下の押尾芳江さんを紹介します。

芳江さんは夫と2人で米とネギやトウモロコシなど露地野菜を生産しています。

17年前に農業を始めた頃は「単に生活のための農業」というのが仕事に対する思いでした。

しかし、平成8年にパソコン教室に参加したことをきっかけに複式簿記を開始したことで、農業を経営として見ることができるようになったのです。

現在では過去の数字がデータとして蓄積するにもなって、経営主である夫も経営的判断が早くできるようになりました。

「今一番やりたいことは？」と尋ねたところ、「機械装備も更新の時期にきているので、経営の充実をはかり、順番に更新を図りたい。」としっかりした経営管理をうかがわせる答えが返ってきました。

そんな芳江さんに同じ女性農業者に対してのアドバイスをお願いしたところ、「勉強する機会を大切にして、どんどん外へ出た方が良いですよ。いろんな人と知り合えることで自分とは違う情報が得られます。そして、それは自分に活かすことができます。」

積極的に学ぶ大切さを知り、芳江さんは去年までの4年間、横芝町の食生活改善推進委員をつとめました。また、現在は山武地域農村生活アドバイザーとしても活躍されています。

最後にこれからの目標について伺ってみたところ、

「将来も夫婦2人でやっていける農業を目指して直売部門を充実したい。」とのことでした。

庭の育苗ハウスの中には、芳江さんが育てているブドウが植えられていて、たくさんの実を付けていました。

また、嫁いだときから義母に手ほどきを受けたという巻き寿司は、20年の経験があるとのことでした。

何事にも積極的にチャレンジする芳江さん、その表情はとても明るく輝いていました。

# 写真で見るトピックス

写真をクリックすると拡大されます



環境にやさしい  
農業研修会



山武農業フォーラムが  
開催される



横芝町有機増進組合の  
堆肥散布受託始まる



出荷最盛期の  
シクラメン